

# 構造化会議による効率的な会議実現のためのプラットフォーム開発 — 「良い会議」を誰もが実現できるソフトウェア —

## 1. 背景

現在多くの企業は、タスクの共有および意思決定を行うために多くの会議を開き、仕事を進めている。業種および、ポジションにもよるが、一日の業務のほとんどを会議に費やす人も存在している。大手人材サービスグループの研究機関「パーソル総合研究所」と立教大学の中原淳教授は、6000 人のビジネスパーソンへの調査から、ムダな社内会議による損失の推計を算出した。その結果、1500 人規模の会社では、会社全体の年間会議時間は 42 万時間なのに対し、無駄だと思われる会議はそのうち約 2 割の 9 万時間に及ぶ。そして、その無駄な会議に費やされる年間総人件費は約 2 億円とされている。

また近年、コロナ禍によりリモートワークが定着する中で、オンライン会議が急速に増加した。その結果、今まで移動に充てていた時間にも会議スケジュールが入り、会議の数や時間が増加した。つまり、会議に関する課題は今だからこそ早急に解決すべきである。

## 2. 目的

本プロジェクトでは、ルールベース型の会議の枠組みを提供することで、効率的な会議の実現を支援するソフトウェアの開発を目的とした。本プロジェクトの特徴は、会議の構造化を実現し、事前情報等会議に必要な情報を全て明示された状態で会議進行を可能にしたことである。本プロジェクトの成果によって、誰もが効率的な会議を行うことが可能になることを目指す。

## 3. 開発の内容

本プロジェクトでは、構造化会議を実現するための Web アプリのプラットフォーム D-meeting を開発した。D-meeting は会議の構造化を実現し、必要な情報を元に必要な結果を得るための会議支援ソフトウェアである。

D-meeting の主な機能は以下の 3 つである。

- 会議設計機能

会議を行う前に、会議場所や時間などの基本情報、議題および議題に対するゴールや議題のカテゴリなどの議題情報、議題ごとの論点・事前情報・報告事項の詳細情報を入力し会議を設計する(図 1)。この機能を使い会議を設計することで会議に必要な情報と会議で決めるべきことを明確にできる。

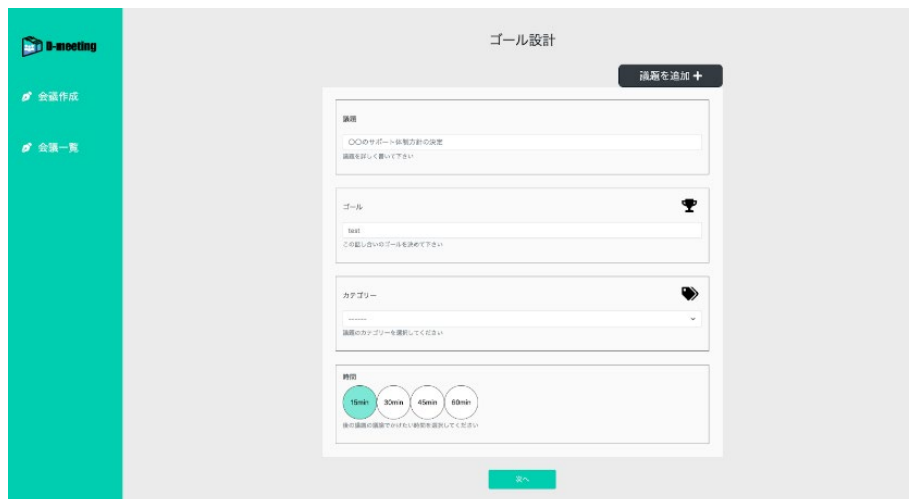


図 1:会議設計画面

- 会議進行支援機能

設計機能で設計した会議を設計通りに進行させるための機能で、フォーム機能と進行支援 Bot 機能の 2 つから成り立つ。本プロジェクトで制作したアプリケーションは会議の論点に対する結論をフォームに入力するだけで会議が進行する(図 2)。本システムのフローに則ることで、議題や事前情報などがひとまとまり明示される。そのため、参加者はそれを元に、より円滑な議論を行うことが出来るようになる。また、本システムでは論点に対する結論を入力することが次の議題に進めるための条件となっている。そのため、終了条件が明確になり、かつ必要な議論が尽くされた状態を実現することが出来る。また、会議が脱線した時に、または会議の結論の入力がスムーズに進んでいない時に軌道修正のメッセージが表示されることで、適切な議論を促進する。これらの機能によって、会議において話漏れや記入漏れの無い効率的な会議進行が実現される。



図 2:会議進行支援画面

- 議事録自動生成機能

会議設計機能で作成した議題、ゴール、会議進行支援機能のフォーム機能に入力した論点に対する結論などの必要な情報のみが記述された議事録を自動で作成し、PDF などの形式でダウンロードすることで議事録を構造化し保存することができる(図 3)。



図 3: 議事録が自動生成された画面

このソフトウェアは Web ブラウザ上で動作するアプリケーションとなっており、フロントエンドは JavaScript のフレームワークである Nuxt.js を、バックエンドは Go を採用した。会議設計 API、会議進行 API、議事録作成 API をそれぞれマイクロサービス化した点や既存の PDF 変換ライブラリを大幅に軽量化した点が本プロジェクトの技術的にこだわった点である。

#### 4. 従来の技術(または機能)との相違

既存の研究で、既に構造化された議事録を作成し知識の再利用を図る研究は既に取り組まれている。本プロジェクトでは会議アーカイブの構造化手法をベースに、これを会議設計に導入することを検討している。会議設計の構造化はいまだ開拓されていない分野であり、未踏性があると考えている。

#### 5. 期待される効果

本プロジェクトでは、「無駄な会議を失くしたい」というビジョンを常に念頭に置いて開発を進めてきた。このアプリケーションが世の中の企業で使われることで、会議時間の短縮および高効率化が見込まれると考える。また、議事録を構造化し保存することでいつの会議で何を決めたかいつでも見返せる状態となり、アーカイブを残す必要性の理解につながる。

本プロジェクトで作成したツールは会社の会議の価値観を変えるだけでなく、日本の社

会人の会議への意識を変えうるアプリケーションとなると確信している。

#### 6. 普及(または活用)の見通し

本プロジェクトでは、開発段階で既に会社の会議に課題を抱えている社会人の方にヒアリングを行っており、そのヒアリングの内容を元に、機能の設計を行ってきた。

現在、根幹の機能の実装は全て終了しており、会議進行支援 Bot の改修が終了すると世の中の会議でも使用できるのではないかと考えている。まずはヒアリングを実施した企業に使っていただき機能改善を行った上で一般公開することを検討している。

#### 7. クリエータ名(所属)

- 三宅 健太郎(筑波大学 情報学群 知識情報・図書館学類)
- 寺門 幸紀(茨城工業高等専門学校 国際創造工学科 情報系)
- 横浜 希(東北大学 大学院工学研究科 材料システム工学専攻)
- 山縣 帆高(沼津工業高等専門学校 機械工学科)